転生したら、
なんか頼られるんですが 3

ALPHA LIGHT

猫月晴
Nekozuki Haru

アルファライト文庫

登場人物紹介

ラック
謎の組織の手伝いをしている青年。
アステルのことを気にかけている。
ネズロ
謎の組織を率いるボス。
フェルモンドとは旧知の仲。
アステル
チートな眼を持つ
ミステリアスな少女。
フェルモンド
アドストラム家の家庭教師。
勉強のことを話し出すと
とまらない。
15歳
5歳
エルティード(エル)
本作の主人公で元・社畜社員。
常識外れな能力で
いつもやりすぎてしまうのが悩み。
ギルドに行くときは成長魔法で15歳の姿に
変身しているが、本当は5歳。

1

来る『災厄の日』に備え、新しい魔法体系を見つけるべく、エルフの里へ出向いた俺――エルティード・レシス・アドストラムは、エルフが使う独自の魔法を習得することに成功した。

そして、無事に家に帰り着き、早速そのことを家庭教師であるフェルモンド先生に伝えようと思っていたのだが――

おかしい。いくらなんでもおかしい。

目の前に置いてあった本を放り投げるように置いて、空を仰ぐ。

俺がエルフの里から戻って、三日が経った。

今日は前世でいう日曜日のような日で、子供たちの学校も、大人の仕事も休みだ。

本来なら今日は、フェルモンド先生がここアドストラム家へ家庭教師に来る予定の日だった。

ついでにエルフの里でのことも伝えようと、俺はどう話すかアレコレ考えながら待って

いた。

しかし、フェルモンド先生はいつまで経っても現れない。

少しぐらいなら誰でも遅れることはあるだろうと、勉強しながら待つこと数時間。明らかに遅刻の範疇を超えている。

兄姉たち、特に兄様のルフェンドは待ちくたびれてしまい、勉強を放り出してメイドのラディアにおやつをたかりにいく有様だ。

かろうじて真面目に勉強していた俺も、そろそろくたびれてきた。

フェルモンド先生は連絡もせずに約束をすっぽかすような人ではない。というか、通常時なら毎回時刻の五分前、いや十五分前には到着しているような性格だ。

だから時刻を大幅に過ぎても来ないことに、俺は不満よりも焦りを感じていた。

ひょっとして何かあったのかもしれない。

「フェルモンド先生はまだ来ないの？」

おやつを食べ終えて戻ってきた兄様が、扉の方向を見ながらそう言った。

「こんなに遅れるだなんて、フェルモンド先生に限ってあり得ないわ。わたしもお菓子をもらってこよっと」

兄様に続いて、姉様のセイリンゼもラディアのところに走っていってしまった。

しばらくして、姉様が戻ってくる。

兄様も姉様もフェルモンド先生が遅刻していることが気がかりなようで、心配しているのは俺だけではなかったらしい。

二人がラディアから聞いた情報によると、同じくフェルモンド先生が来ていないことを不審に思った父様のゼルンドは、領地内を捜しにいったとのこと。

『あいつのことだから行き倒れている可能性がゼロではない』と言って出ていったようだ。

流石に行き倒れてはいないと思うが、フェルモンド先生が何か事件に巻き込まれていないことを願う。

「ところでもう勉強やめてもいいかな」

「流石にいいでしょ。もう三日分ぐらいはやったわよ」

すっかり集中力が切れてしまった様子の兄様と姉様が言う。

「兄様も姉様も呑気ですね……でも三日分やったのには同意します」

もしかしたら緊急事態かもしれないというのに、楽観的な二人に呆れつつ、俺も読んでいたページを閉じた。

俺が読んでいたのは大陸の歴史についての本だったのだが、小難しい表現のせいで余計に頭が疲れた。回りくどい言い回しはやめてほしいものだ。

俺もラディアのところにおやつを強奪しにいこうかと考えつつ、くるくるとペンを回そうとして慌ててやめる。

これは万年筆だから、ペン回しなんてしようものならインクが漏れて大惨事になる。前に一度やらかしたことがあるというのに、染み付いたくせはなかなか抜けてくれないようだ。

再び本に向き合おうとしたところで、ラディアがお茶とお菓子を運んできた。今日の茶菓子はクッキーのようだが、やけに枚数が少ない。

それをラディアに尋ねると、「どこかのお二人がつまみ食いをしたからかもしれませんね」と恨みがましく呟かれた。

兄様と姉様を止めなかったのは確かに悪かったけど、俺は無罪だ。

ひとまず勉強は切り上げて、あとはフェルモンド先生を捜しにいった父様が帰ってくるのを待つことにした。

◇　◇　◇

「フェルモンド先生が……行方不明!?」

俺は思わずそう叫んだ。

長時間遅刻している時点でなんらかのトラブルが起きたのは決定事項のようなものだったが、まさか行方不明になっているとは思いもしなかったのだ。

責任感のあるフェルモンド先生のことだ。

何も言わずに、自主的に行方をくらますことはないだろう。だとすれば、誰かに攫われた、拉致された、辺りを考えるのが妥当である。

フェルモンド先生が行方不明になったという大ニュースを知った経緯はこうだ。

時間は、少し前にさかのぼる。

俺、兄様、姉様の三人はフェルモンド先生のことを心配しつつも、おとなしく各々の過ごし方で父様の帰りを待っていた。

しかし、そこで問題が起きた。

父様が不在にもかかわらず、連絡用の魔道具に反応があったのだ。それに応じたラディアが真っ青になったかと思うと、すぐに屋敷を飛び出していった。

そしてラディアに連れられて父様が帰宅した。

帰ってくるなり父様は、待ちぼうけを食らっていた俺たちのもとにやってくると、『フェルモンド先生が行方不明』という衝撃の事実を告げたのだった。

「今朝から行方が分からないそうだ。王宮の人員を総動員して、王都のほうでも捜してい

るようだが、見つからないらしい。魔道具の反応は、ここに来ていないかという確認の連絡だったようだが、まさかそんなことになっていたとは……無断で長期間外出している可能性は低いだろうから心配だな」

父様は俺と同じく、まさかフェルモンド先生に限って自分でいなくなることはないだろう、と思っているようだった。

「ひとまず今日の分の勉強は切り上げて、好きに遊んできなさい」

父様が言った。

兄様と姉様は思うところがありそうだが、その言葉に頷いていた。

俺も例に漏れず頷きはしたが――それを聞き入れる気はなかった。親しい人が行方不明と聞かされて、おとなしく待っていられるわけがない。

自室に戻り、壁に聞き耳を立てて、廊下に人がいないか確認する。

部屋の外からは人の気配も物音もせず、誰もいないようだった。それをしっかりと確かめたあと、ようやく転移魔法を発動した。

パッ、と周囲の景色が王都の町並みに切り替わる。

まずは聞き込みからだ。フェルモンド先生はモノクルを身に着けているのが特徴的だから、町の人にも、そういう人を見なかったかと聞けばいいだろう。

通りをぐるりと見渡すと、花を売っている女性と目が合った。ちょうど客足が途切れているようだ。今なら仕事の邪魔にもならないだろう。

「すみません、ちょっと聞きたいことがあるんですけど。モノクルをつけた男性を見かけませんでしたか？」

「モノクル？　珍しいから見たら忘れないと思うけど、少なくとも私は見かけた覚えはないわ」

「そうですか……ありがとうございました」

収穫はなし、と。まあこれも予想の範囲内だ。

そもそも既に王宮の人たちが捜索をしているというのに、俺が捜したところでそう簡単に見つかるわけがない。

次は道端にいた男性に声をかけてみるも、返事は似たようなものだった。

その後も数人に聞き込みをしたが、やはりフェルモンド先生を見かけたという情報はなかった。

完全にお手上げ状態になって王都の通りをトボトボと歩いていると、地面に落ちている紙が目に入った。

道の端に落ちていたそれは、遠目から見てもびっしりと文字が書き込まれていることが

分かる。誰かの落とし物だろうか。

見つけてしまった以上放置するのも気が引けて、その紙を拾い上げたところで、俺はあることに気が付いた。

「これ、フェルモンド先生の字と似てる」

勉強を教えてもらう中で、何度も見ているから分かる。

似ているどころの話じゃない、この角ばった几帳面な文字は間違いなくフェルモンド先生本人のものだ。

他に手がかりはないか辺りを見渡すと、裏路地へと続く細い通路の前に、また小さなメモ用紙が落ちているのを見つけた。

こちらは少し乱雑なものの、やはりフェルモンド先生の字で書かれている。

二枚とも複雑な数式と走り書きのような文章が添えられており、内容は難しくてよく分からなかった。

しかし紙が落ちていたということは、フェルモンド先生はこの周辺を通ったはずだ。もしかしてまだ近くにいるかもしれない。

早速裏路地へと足を踏み入れようとしたところで、この場所は治安が悪いから一人では行かないようにと、父様が以前言っていたのをふと思い出した。

魔法が使えるから身を守れるとはいえ、この幼い子供の姿では目立つし、色々と危ない。

周囲に人影がないのを確認して、素早く魔法で姿を十五歳くらいに変えた。

外見の成長にともなって、一気に目線が高くなる。最近はあまりギルドへ行っていなかったから、この姿になるのも随分と久しぶりな気がする。

王都といえども、その全てがきらびやかであるわけではない。

目の届かない場所で横行する犯罪や、貧困により形成されたスラム街など、どうしても発生してしまう不幸はある。

もといた世界と比べて、文明レベルが発展していないからなおさらだ。

自分の身を守れる程度の力が俺にはあるが、この先は警戒を怠らないほうがいいだろう。

そう思って気を引き締める。

狭い通路を通った先は、表通りとは随分と違う雰囲気だった。

建物に挟まれているせいで日の光の大部分が遮られ、薄暗い。あちこちにゴミやガラクタが落ちており、心なしか空気も淀んでいるような気がする。

他にフェルモンド先生の落とし物や、ヒントになりそうなものがないか、辺りに注意しながら歩いていると、どこからか怒鳴り声が聞こえてきた。

流石の治安の悪さだ。

「だからもう何も持ってないんですってば！　勘弁してください！」
「んなこと言ってないでさっさと出せよ。でなきゃ……どうなるか分かってんだろ？」
話の内容からして、どうやら輩がカツアゲをしているようだ。
普段なら気を付けつつ、そっと覗いてみるところだが、今はフェルモンド先生を捜すことを優先すべきだ。心が痛むが、今回はスルーしよう。
良心の叫びに目を背けて、俺は足早にその場を去ろうとした。
しかしその瞬間、明るいピンク色の髪をした女の子が、声のする方向へ走っていったのが見えた。
あの髪色、どこかで見たような……
たっぷり数秒間考えて、あのピンク髪の女の子が、以前冒険者ギルドで知り合ったクレアさんだということを思い出す。
まさか、輩に立ち向かうつもりなのか。
「クレアさ――」
呼びかけたときには、もうクレアさんは走り去ってしまっていた。たっぷり思い悩んだから当たり前だ。
優先順位も忘れて、クレアさんが走っていったほうへ向かう。

女の子一人で悪漢に立ち向かうのは無茶だ。
それに怒鳴り声を上げていた男は、酒やけした野太い声からして、いかにも危なそうだった。
角を曲がり、突き当たりの路地に飛び込むと、四十代ぐらいに見えるくたびれた印象の男性が、いかにもという悪そうな格好をした男に、胸ぐらを掴まれていた。
男は声の印象そのままの巨躯で、あの拳で殴られようものなら、一発でノックアウトしてしまいそうだ。
そしてその男の背後にはクレアさんが立っている。早く止めないと、と思ったところで、大きく息を吸い込む音が聞こえた。
「ちょっと、その人に何してるの！」
クレアさんは声を張り上げてそう言った。
チンピラの男は振り返り突然の乱入者に驚いたようだったが、少し遅れてクレアさんを見据えた。
怯えている男性から手を離すと、不機嫌さを隠しもせず、ずかずかとクレアさんのほうに近寄っていく。
「なんだお前。このオレのやることに文句があるってのか？」

「当然です！　こんなことをして許されるとでも思っているんですか？」
クレアさんは声を荒らげる男にも物怖じせず、そう続ける。
カツアゲをしていた男は彼女の言葉が気に入らなかったのか、ぎろりとクレアさんを睨み付けた。
「……生意気なガキだな」
そう呟いたかと思うと、男は握りしめた拳を大きく振りかぶる。
「クレアさん！」
俺は男とクレアさんの間に滑り込むようにして、慌てて身体強化魔法をかけながら、拳をなんとか受け止める。
動作が大きかった割に、拳はたいして重くなかったから、よろけずに済んだ。
「あ、あなたはエルさん？　どうしてこんなところに……」
「今度はなんだよ、どいつもこいつも邪魔しやがって。オレはあの『夜鴉団』の団員なんだぞ！」
クレアさんの言葉を遮りながら、男は大声でそう怒鳴った。至近距離で怒鳴られたものだから、耳がキーンとして、俺は思わず顔をしかめる。
男は自身が『夜鴉団』とやらに所属していることを誇りに思い、それを盾に力をふるっ

ているようだったが、あいにく俺はそんなものは知らない。
しかし喚いているこの男を抱えていることからして、おそらくまともな組織ではないことがうかがえた。
カツアゲ男は完全に頭に血が上っているようだ。
脅されていた男性にこっそりと、逃げるよう視線で訴える。逃げ道ができるよう、少しずつ壁沿いに移動して、チンピラの視線を突き当たりと路地から逸らす。
男性は俺の意図を理解したのか、小さく頷くと、男の死角から逃げていった。
クレアさんにも同様に逃げてほしかったのだが、彼女に視線を送るより前に、男が俺の胸ぐらを掴んだ。宙に浮くとまではいかなかったものの、強制的につま先立ちになる。
「お前らは、オレたちに逆らったらどうなるのか分かってねぇようだな。それならいい機会だ。存分に教えてやるよ！」
男は怒り剥き出しといった表情でそう言った。胸ぐらを掴んでいる手を払いのけようとしたところで、ふと思いとどまる。
今手を離させては、まだ逃げていないクレアさんに危害が及ぶかもしれない。それに、何発か食らって怪我をすれば正当防衛になって、こいつを倒しても罰を受けなくて済むのでは……？

そう考えて、あえて眼前に迫る男の拳を受けようとしたのだが、痛みが来る前に男が「うぐっ」とうめき声を上げた。

同時に男の手から解放された俺は、バランスを崩して転びそうになり、慌てて体勢を立て直す。

「エルさん、無事⁉」

そこには、男に向けて杖を構えたクレアさんが立っていた。どうやらクレアさんが、男に向かって魔法を放ったようだ。

「僕は大丈夫だけど……」

「よくもオレをここまでコケにしてくれたなァ！　ちょっと痛めつけるだけのつもりだったが、もう我慢できねェ！　お前ら二人まとめてブッ殺す！」

俺の言葉を遮って、男がそう叫んだ。

男は怒り心頭といった様子で目を赤く血走らせている。いかにも小物らしさ溢れるセリフに少し笑いそうになるが、今はそんな場合じゃない。

クレアさんはよかれと思って助けてくれたのだろうが、少しまずいことになった。

魔法でちゃちゃっと倒せれば楽なのだが、こちらが傷を負っていない以上、下手に手を出してしまうと、俺たち側が罪に問われる可能性があるのがネックだ。

さっき身体強化魔法をかけないで普通に攻撃を受ければよかったな……

あっちが悪いのは明らかなのに、攻撃できないのが歯痒い。

「わわ、どうしよう……すごく怒ってます……」

「あいつは僕が止めるから、クレアさんは早く逃げて。あれだけ逆上してると、何をしでかすか分かったもんじゃない」

「で、でも……」

「大丈夫、これでもＳランク冒険者だから。あんなやつには負けないよ」

クレアさんは迷っているようだったが、俺がＳランクであることを告げると、納得してくれた。

「コソコソと何話してやがる！」

「早く！」

一気に距離を詰めてきた男を見て、そう短く叫ぶ。

クレアさんが走り出したのを確認してから、男のほうへ向き直る。すると、男はちょうど俺に向かってパンチを繰り出しているところだった。

繰り出された男の拳の速度が想像よりも速く、俺の頬にしっかりと入る。衝撃があり、遅れて痛みが襲いかかってくる。

「ヒャハハ！　油断なんかしてるからだ！」
男は心底愉快そうに、汚い笑い声を上げた。
地面に倒れ込みそうになったのを、気合で踏みとどまる。いつも魔法で防御しているから、よほどのことがない限り、俺まで攻撃が届くことはない。
もちろん前世でも傷を負うことはほとんどなかったから、思いきり殴られるのはこれが初めてだった。
想像以上の痛みに顔をしかめる。
「――でもこれで、正当防衛だ！」
身体強化魔法をかけ直し、男に向かって蹴りを繰り出す。
狙うは男の急所……股間にクリーンヒットだ。男は一瞬固まったあと、股間を手で押さえてうずくまったまま動かなくなってしまった。
無事に男を倒し、このあとどうするか考えていると、複数の足音が聞こえてきた。
後ろを振り向くと、二、三人の人が慌てた様子で駆けつけていた。クレアさんも一緒にいる。
鎧や槍を持っているところからして、巡回中の衛兵のようだ。
王都では治安維持のため、定期的に衛兵が見回りをしているのだ。それをクレアさんが

呼んできてくれたのだろう。ナイス、と言いたいところだが、つい先ほど事態は収まってしまった。
「悪漢に襲われていると報告を受け……たのですが……」
衛兵の一人が、うずくまって震える男を見て、戸惑いがちにそう言った。
俺とこの男ではかなり体格差があるから、男のほうが倒れていることに驚いているのかもしれない。
衛兵は男が股間を押さえているのを見ると事情を察したのか、男に気の毒そうな視線を向けた。同じ男として痛みが分かるからだろう。
俺ももし自分がこうなったらと思うと背筋が凍る。
「その、えっとですね……一応正当防衛ではあるんです……」
赤くなった自分の頬を指差して言う。
「分かっていますよ。こいつは最近、ここらでよく問題を起こしていたんです。毎回逃げられていたので、今回は助かりました」
疑われなかったことに胸を撫でおろしつつ、股間を押さえたまま連行される男を眺める。
想像以上にいい一発を決めてしまったようだ。相手は悪人なので、同情の余地はないことは百も承知だが、少しだけ申し訳ない気分になった。

「全く夜鴉団だかなんだか知らないけど、いい迷惑ですよ。それにしてもお嬢さん、綺麗なのになかなか強いですね」
「お嬢さん……？」
無意識にドスの利いた声を出してしまったせいで、衛兵の肩がびくりと跳ねる。
「こっ、これは失礼。お姉さんとお呼びするべきだったかな」
「実は僕、これでも男なんですよね」
「おや、そうでしたか……って、ええーっ!?」
大げさに驚く衛兵を、これでもかというほど思いきり睨み付ける。
人のコンプレックスを刺激するのはやめてほしいところだ、さもないとデリカシーなさ男というあだ名をつけてやるぞ。
「その夜鴉団ってなんですか？」
『お嬢さん』という単語に気を取られて聞き流していたが、夜鴉団というのはそこまで有名な組織なのだろうか。
あの男も『オレは夜鴉団の団員なんだぞエッヘン！』的なことを喚いていたが、てっきり男が大げさに言っているだけだと思っていた。
「お嬢さ、ゴホン、お兄さんは夜鴉団をご存じないのですか？　王都の人ならば皆知って

いるものとばかり思っていましたが。最近活発に動いている組織で、問題ばっかり起こすんですよ。噂じゃ非合法なこともやっているとか。全く一筋縄ではいかないから困ったもんです」
衛兵はため息交じりにそう言った。そういえば最近巡回している衛兵が多い気がしていたが、それも関係あったのだろう。
あちこちに駆り出されて忙しくしているのか、ここにいる衛兵は全員疲れているように見える。
「お兄さんも気を付けてくださいね。夜鴉団もそうですけど、最近の王都は色々と物騒ですから」
衛兵はそう言うと、男を無理やり立たせて連行していった。コンプレックスを刺激してきたのは減点だが、それ以外は親切でいい人だった。
「そうだクレアさん、衛兵を呼んできてくれてありがとう」
「いえ、私は呼んだだけなので。エルさんにお怪我がなくてよかった」
衛兵を見送っていたクレアさんは、俺のほうに視線を戻すと、照れくさそうにそう言った。
「そういえば、クレアさんはどうしてこんなところに？　裏通りは危ないんじゃ」

「実は、夜鴉団の調査をするっていう依頼を受けていて、団員がこの辺りにいるという噂を聞いてここに。まぁ、全然収穫はまだないんですけど……報酬がよかったのでつい」

クレアさんは気まずそうに目を逸らしながらそう言った。

報酬につられるのはとてもよく分かるが、女の子一人で悪漢に挑むのは危険だ。

魔物相手なら遠慮なく魔法を使えるし、知能もそれほど高くないが、人間相手だと攻撃を躊躇ってしまったり、集団で攻撃されたり、厄介な部分もある。

「エルさんこそ、どうして裏通りに？」

クレアさんにそう尋ねられ、フェルモンド先生を捜していたことを思い出した。トラブル続きですっかり頭から消え去っていた。

もしフェルモンド先生がこの辺りに来ていたのなら、もしかしてああいうゴロツキに絡まれたのかもしれない。それこそ夜鴉団の団員とか。

フェルモンド先生は身なりもいいし、連れ去られて人質に……とかいうことも十分あり得る。

これだけ証拠が少ないと断定するのは無理があるが、かなり有力な線ではないだろうか。

そうと決まれば早速行動だ。

「よかったら、その調査一緒に行っても？　クレアさん一人じゃ危ないだろうし、僕も気

になることがあって」

「もちろん！　あ、でも報酬はどうしましょう。半分じゃSランクの方に失礼かな……」

「いやいや、僕が勝手についていくだけだから。報酬は一切いらないよ」

慌てて報酬がいらないことを伝える。

クレアさんは「三分の一だけでも、せめて四分の一でも……」と言ってなかなか引いてくれなかったが、最終的には渋々といった様子で納得してくれた。

「エルさんがいてくださるなら安心ですね！　さぁ、早速調査です！」

クレアさんは意気揚々といった様子で歩き出したが、すぐにぴたりと動きを止めた。

「何か？」

「情報、さっきの団員のこと以外、何も知らない……」

「なんてこった」

思わず口から心の声が飛び出てしまった。全然収穫がないとは言っていたものの、全くのゼロだとは思っていなかった。

「どうしましょう……」

クレアさんはひどく落ち込んでいるようで、心なしか彼女の周りだけ暗く見えるような気までしてくる。

「そ、そんなに落ち込まなくても！　ほら、この辺りの人に夜鴉団のことを聞いてみるとか！　やりようはいくらでもあるって！」
「そうですね……あはは……」
慌てて励ましても効果はないようで、クレアさんは乾いた笑いを零しただけだった。俺とクレアさんの間に、なんとも言えない気まずい空気が流れる。
しかしその空気は、突如として俺たちの間に割り込んできた老人によって打ち破られた。
「そこの若いの、夜鴉団について調べているのかい？」
背を曲げた老人は、俺たち二人の顔を見てそう尋ねてきた。クレアさんがその言葉に頷くと、老人は顔をしかめた。
「その、何か？」
老人の苦虫を噛み潰したような表情を不思議に思って、俺はそう聞く。
「お前さんたち、夜鴉団には関わらないほうがいいぞ。なんでも法に触れることだけじゃなくて、禁忌すら破ろうとするような恐ろしいこともやっているようじゃ。関わろうものなら呪われるぞ」
老人は眉間の皺を深めながら、吐き捨てるようにそう言った。
衛兵も言っていたが、夜鴉団という組織はやはり一筋縄ではいかないようだ。

呪われる、という部分は噂に尾ひれがついただけだろうが、関わらないほうがいいのは本当のことなのだろう。
しかし、俺にはフェルモンド先生を捜すという、そしてクレアさんには夜鴉団の調査という、それぞれ目的があるのだ。忠告はありがたいが、関わらないというわけにはいかない。
そりゃあフェルモンド先生のことがなければ、俺だってそんな物騒な組織には絶対関わらないだろうが、今は仕方ない。
それにしてもこの老人。タイミングよく現れてくれたものだ。ちょうど情報がなくて困っていたところに出てきてくれるなんて。
「おじいさん、夜鴉団について詳しいんですか？」
「おじいさんとは何事じゃ！　わしはまだまだ現役じゃぞ！」
何気なく言った単語がまずかったらしく、老人はカッと目を見開いてそう叫んだ。
なるほど、この老人にとって『おじいさん』という単語は、俺にとっての『姉ちゃん』『お嬢さん』と同じく、ＮＧワードのようだ。
「ふん、全く最近の若いのは失礼なやつが多い。ところでお前さん、わしの忠告を聞いておらんかったようじゃな。夜鴉団には関わらないほうがいい、とつい今しがた言ったじゃ

ろう」
「忠告はありがたいんですが、僕たちにも色々とありまして……」
老人は後ろでオロオロしているクレアさんを一瞥すると、再び俺に視線を戻した。かと思うと、頭のてっぺんからつま先までジロジロと見定められる。
「どうしても知りたいというのならば、教えてやらんこともない。ただし――」
「何か条件がある、と」
「そのとおりじゃ。お前さん、なかなか察しがいいようじゃないか」
老人は少しだけ表情を緩めてそう言った。
父様の弟でアドストラム国王でもある、ヴァルドもとい馬鹿王のせいで、条件を出されることには嫌というほど慣れているのだ。
こんなことを察するぐらい朝飯前だ。
「率直に言うと盗られた亡き妻の指輪、形見を取り返してほしい。大切に保管していたんじゃが、やつらに目をつけられてな。無理やり奪われたんじゃ」
老人は悲しげな声で、条件を告げた。
おそらく結婚指輪か婚約指輪か、その辺りの二人の思い出の品なのだろう。形見を奪うだなんてひどすぎる。

「奥さんの大切な指輪を奪うなんて、夜鴉団許すまじです！」
俺が口を開くより先に、クレアさんがそう言った。
「ただ私一人じゃ心細いので、正確には私たち、ですが……」
クレアさんは自信なさげにそう付け加えた。彼女の剣幕にあっけにとられていた老人が、思い出したように俺のほうへ視線を向けた。
「……頼んだ。若いの、十分気を付けるんじゃぞ」
「分かりました。もし見つけたら、必ずおじいさんに渡しにきますから」
老人は周りに人がいないのを確認してから、俺たちに側に寄るよう手招きする。そして小声で老人の知る限りの情報を教えてくれた。
話によると、夜鴉団の噂は前々からあったらしかった。
初めは詳細がはっきりしない都市伝説のようなものだったが、次第に夜鴉団を名乗るメンバーが現れて、実際に事件が起き始めたようだ。
そしてここ数か月間で異様な発達を遂げているらしい。
夜鴉団の行っていることは、暴力行為、違法な商売、不正な賄賂による貴族社会への介入。
たった数か月という短期間で、様々な悪事をしている。そして、そんな中でも最も老人

が気がかりにしていたのは、禁忌を犯しているという噂だった。
そして老人は最後に、夜鴉団のアジトの場所を俺たちに伝えた。一度夜鴉団のメンバーを名乗る男のあとをつけたことがあり、そのときに発見したそうだ。
この人の言うことが全て本当かは分からない。
ただの噂や思い込みという可能性だってある。
けれども今は、それら一つ一つについて考え、調べている余裕はない。
こうしている間にも、フェルモンド先生が危険に晒されているかもしれない。
俺たちは老人に礼を告げたあと、夜鴉団のアジトがあるという場所、王都の郊外へと足を向けた。

2

「本当にこんな場所に、夜鴉団のアジトがあるんでしょうか」
「あのおじいさんの言っていたことが間違ってなければ、そのはずなんだけど……」
王都の郊外、森の奥深く。俺たちは老人に教えてもらったアジトの場所に来ていた。

勾配のキツい坂を上ったり、獣道を歩いたり。老人の言っていた場所は確かにここだが、アジトどころか、人の気配すら感じられない。
ここ一帯は人の手がほとんど入っていないようで、木はのびのびと空に向かって育ち、草は好き放題に生い茂っている。
体を大きくしていることもあり俺は問題ないが、クレアさんは表情や動きに疲労が見え始めている。
もう少し探して見つからなかったら一旦休憩にしよう、そう思いながら歩くスピードを落とす。
そして一向にアジトらしきものは見つからず、諦めかけてきたときだった。
ふと地面に目をやると、不自然に草がなくなっている箇所が目に入った。辺りの地面は乾いているというのに、その部分の土だけやけに湿っている。まるでつい最近掘り返されたみたいだ。
不審に思って土を払ってみると、爪がガリッ、と何か硬いものを引っ掻いた。出てきたものをよく見ると、板のようだ。
その板にはちょうど指を差し込めるほどの穴が開けられており、簡単に持ち上げられそうだ。

「エルさん、どうかしたんですか？」
近くの木陰で休憩していたクレアさんが、座ったまま俺にそう尋ねた。物音を立てないよう注意しながら、クレアさんのほうへと移動する。
「アジトの入り口かもしれないものを見つけた。でも外から中の様子を確認できそうになくて」
「なるほど、突入するってことですね。ちょっと休んで回復したし、私はいつでもいけますよ！　いざとなったらエルさんもいるし！」
元気よくそう言ったクレアさんに、静かにするよう口元に人差し指を当てるジェスチャーをする。クレアさんは慌てた様子で、自分の口を手で塞いだ。
今元気な声を出されると敵に勘づかれるかもしれない。
もう一度、今度はクレアさんとともに板がある場所へと近付く。
もし後ろから組織の人間が来ても大丈夫なように、クレアさんには辺りの警戒を頼んだ。
俺は板を開けて、すぐ中から攻撃されても対応できるよう、そちらに注意を払っておく。
板の穴に指を差し込み、そっと持ち上げようとする。しかし、それは後ろから物音が聞こえたことによって阻まれた。
振り返るよりも先に、ガン！　という音とともに視界が揺れる。少し遅れて後頭部に鈍

い痛みがやってきて、殴られたのだと理解できた。
揺れる視界の中で、二人いる人物のうち、片方に捕まっているクレアさんが見えた。
彼女は一瞬で口を塞がれて、声を出す間もなく捕らえられてしまったようだ。
それを見て、地面に倒れ伏しそうになった体を無理やり立て直す。
「クレアさんを離せ！」
視界はまだグラグラと揺れているものの、なんとか意識を失わずに済んだ。考えたことがなかったが、俺は石頭なのかもしれない。
意識を集中して、取り出した短剣を構える。
二人いる人物のうち、手の空いているほうの背の高い男性が前に出た。
男性は黒々とした髪を耳上辺りで切り揃えており、白い肌が全身真っ黒い服装と相まって、かなり不健康そうに見える。
吊り上がった鋭い目は、しっかりと俺の姿を捉えている。警戒を強めていると、男性が口を開いた。
「お前、どこの手のもんだ？　見慣れない顔だが」
そう聞かれても黙ったままの俺に気を悪くしたのか、男性は小さく一度舌打ちをした。
そして後ろにいたクレアさんを捕らえている男に指示すると、自身の横まで連れてこさ

せた。

一体何をする気なのかと警戒する。

黒髪の男はおもむろにクレアさんの顔を掴むと、無理やり顔を上げさせた。頬に爪が食い込んでいるのか、クレアさんが顔を歪める。

「ふーん、なかなかの上玉じゃねえか。こいつを置いてくってんなら、お前のことは見逃してやってもいいぜ、白髪野郎」

男性はクレアさんから目線を外さないままそう言った。白髪野郎、と言われて思わずムカッとしてしまう。この目立ちすぎる髪色、一応気にしてるんだからな。

クレアさんはひどく怯えた表情で、目線だけ俺のほうへ向けた。声に出さずとも、『助けて』と思っていることが分かった。

「もう一度言う。クレアさんを離せ」

俺がそう言った瞬間、ピリッと空気が張り詰める。男性はクレアさんから手を離すと、こちらへと一歩踏み出した。

「こいつを置いて失せろ、さもなきゃ殺す。オレはそう言ってんの。分かる？」

男性は先ほどとは一転、ドスの利いた声でそう言った。あまりの圧に気圧されそうになるが、ぐっと堪える。

俺はどうするべきか。いくら魔法がそれなりに使えるとはいえ、クレアさんが拘束されている以上、迂闊に攻撃はできない。二人だけで来たのは、やっぱりまずかったか……

緊張する空気の中、男性はどこからか大剣を取り出した。おそらく空間魔法だろう。

男性はその大剣を軽々と持ち上げると、また一歩距離を詰めた。

大剣は子供の身長を優に超えるほどの大きさで、ずっしりとした厚みのある刀身は、斬るというより叩き潰す、という用途に特化しているように見える。

攻撃が当たろうものなら、間違いなく骨が砕かれてしまうだろう。

細身な男性がそんな大剣を軽く扱っている姿は、どこか異様だった。

気取られないよう細心の注意を払って身体強化魔法をかけようとする。しかしその瞬間、一気に間合いを詰められ、大剣が顔の真横に突き付けられる。

「おっと、そうはさえねぇぜ」

詠唱も、身じろぎ一つすらしていないというのに、この男性には俺が魔法を発動させようとしたことが分かったようだった。

今俺が不審な動きをしようものなら、この男性はなんのためらいもなく俺を叩き斬るだろう。そう確信させるような気迫があった。

「さっさと逃げりゃあお前だけは助かったのに、バカなやつだ。何者かは知らないが、オ

レの気分を損ねた以上――」

「ボス、もうじきお時間です。勝手な行動は避けられますよう」

これ以上ないほどの緊迫感の中、透きとおったソプラノの声が響いた。思わず顔を上げる。

さっきまで誰もいなかったはずなのに、クレアさんを拘束している男性の後ろには、いつの間にか金髪碧眼の美しい少女が立っていた。

少女はフリルのあしらわれたブラウスに裾の広がったスカートという、可愛らしい服装をしていたが、男性と同じく身に纏っているものは全て真っ黒だ。

無表情と相まって、少女はまるで人形のように見えた。

「……今いいところだったんだが、そうか時間か。命拾いしたな、お前ら」

ドサ、と捕らえられていたクレアさんが地面に投げ出されそうになったのを、慌てて受け止める。

男性は俺たちに背を向けて立ち去ろうとしている。

おそらくこいつらは夜鴉団、そしてボスと呼ばれているこの男をみすみす見逃すわけにはいかない。

「っ、待て！」

必死に伸ばした手が、男性の服の裾をかすった。それと同時に、不快感を前面に出した表情をして振り向かれる。

「ったく、しつけぇなぁ。やれアステル」

「承知しました、ボス」

瞬間、男性たちは突然現れた少女とともに姿を消した。そう思ったのだが、実際には違ったようだ。

辺りには王都の裏通りの景色が広がっており、先ほどまでいたはずの森ではなかった。

隣には俺と同じく、状況が呑み込めない様子のクレアさんが座り込んでいる。

やつらが姿を消したのではなく、俺たちが強制的に転移させられたようだ。

「逃げられた……」

あと少しで手が届いたのに、ぎりぎりで逃してしまったことに、やりきれない気持ちでいっぱいになる。

空間魔法は難易度が高く術者が少ないはずだ。一瞬で俺たち二人を遠くまで転移させる辺り、あの少女は只者ではなさそうだ。

それにしてもこれからどうしたものか。

今からあのアジトに行っても、場所がバレたことが分かれば、もう夜鴉団は残っていな

いだろうし、俺たちが知っているのはあのアジトの情報だけだった。
手当たり次第聞いたところであまり有益な情報は得られないだろうし……
「エルさん！」
一人で考え込みそうになっていたところを、名前を呼ばれて顔を上げた。
「ごめんなさい、私が油断したばっかりに！」
「クレアさんは悪くないよ。悪いのはあいつらなんだから」
俺がそう言っても、クレアさんは気にしているようだった。俯いていて、眉も下がり気味だ。
「やっぱり私の実力じゃ、夜鴉団の調査なんて無茶だったみたいです……これ以上は無理そうだし、ひとまずギルドに報告してきますね」
「じゃあ、とりあえず解散ってことで――」
そう言ったところで、後ろから耳をつんざくような爆発音が聞こえた。
反射的に後ろを振り返ったものの、吹き付ける爆風のせいで目をあまり開けられない。
がれきのようなものが飛んでくるのがちらりと見えて、急いで結界を張った。結界に入れるため、クレアさんを抱き寄せるような形になったが致し方ない。
結界を張ったことで風が遮断され、やっとまともに景色を見ることができた。爆発音が

鳴った辺りでは、数軒の民家が煙を上げている。
突然の出来事に頭が追い付かないが、ここを離れたほうがいいのは確かだ。結界を解いて、クレアさんの腕を引きながら、爆発音がした場所からなるべく遠ざかるよう走る。
しばらく走ると王都の大通りに辿り着き、一旦走るのを止める。
通りは先ほどの爆発音で騒ぎになっているようで、呆然としている人、野次馬をしにいくのか爆発の方向へ向かう人、一心不乱に逃げ惑う人などで溢れ返っている。
人の波に流されないよう、壁際にぴたりと張り付くようにして歩く。
「爆発だなんて、一体何が起こってるんでしょう……」
雑音に紛れて、クレアさんが不安げにそう呟いたのが聞こえた。
本当に、一体何が起こっているのか。
衛兵も最近王都の治安が悪いと言っていたが、まさか爆発だなんて。
もしかしたらテロかもしれない。何かしらの反乱でも起こったのだろうか。
この世界には爆弾を作れるほどの技術力はないと思うから、魔道具で爆発させたに違いない。
学園祭でゼラード先輩が魔道具を仕掛け、怪我人が出た事件を思い出して、微妙な気分になる。

頭の片隅で、馬鹿王がまた執務に追われそうだな、なんて考えた。
なんとか壁を伝いながら路地へと入る。
しかし角を曲がったところで、前から走ってくる人物が見えた。まずい、と思ったときには既に遅く、正面から思いきり激突してしまう。
相手のほうが体格がよかったため、俺が軽く突き飛ばされるような形になる。
「いってて……」
腰をさすりながら、ぶつかった相手に視線を向ける。左目の辺りに、ちかりと光を反射するものがある。モノクルだ。
「……フェルモンド先生⁉」
目の前にいる人物は確かに俺の捜していた、その人だった。
「すみません、どなたか存じ上げませんが今は急いでいて。申し訳ないのですがお詫びをする時間がないんです」
そう一息で言われ、「え」という声が漏れる。
少し考えて、今は魔法で外見を成長させていたことを思い出した。そういえば、フェルモンド先生にこの姿を見せたことはなかった。
立ち去ろうとしていたフェルモンド先生の腕を慌てて掴み、自身にかけていた魔法を解

いた。
「フェルモンド先生、僕です、エルですよ！」
フェルモンド先生は本来の姿に戻った俺を見ると、驚いた様子で目を見開いた。かと思うと、がしっと肩を掴まれる。
「エルティード様、何故こんなところに！　今王都は危険です。今すぐ安全な場所へお逃げください」
フェルモンド先生は、普段では考えられないほどの剣幕でそう言った。
「ちょっと待ってください、皆フェルモンド先生が行方不明だって心配してますよ！」
「ごめんなさいエルティード様、今はそれどころじゃないんです。早くネズロを止めなければ」
引き止める間もなく、フェルモンド先生は走り去っていった。
頭脳派のはずなのにやけに足が速く、フェルモンド先生の姿はあっという間に路地の奥へと消え去っていった。
呆然としていたクレアさんが視界に入って、はっと我に返る。こうしている場合じゃない、早くフェルモンド先生を追いかけなければ。
フェルモンド先生はやけに焦っていた。『ネズロ』という言葉が気になるところではあ

るが、それは追いかけながら考えればいい。

「ごめんクレアさん、一人で逃げて！　僕はちょっと行ってくる！」

少しでも速度を上げるため、もう一度成長した姿へと戻す。

そしてクレアさんの返事を聞くのも待たずに、フェルモンド先生の去っていった方向へと走り出した。

しばらく走ると、フェルモンド先生の後ろ姿が見えた。

あとからあとから建物を建てているせいで、まるで迷路のように入り組んだ路地を必死で走り抜ける。フェルモンド先生の背中は遠く、このときばかりは高身長イケメンの足の長さを憎んだ。

複雑な道を迷いもせず進んでいくフェルモンド先生の様子に、少しだけ不安を覚える。

一体この先に、何が待っているというのか。

突然の爆発といい、急に現れた焦った様子のフェルモンド先生といい、分からないことだらけだ。『ネズロ』というのも、今の状況と何か関わりがあるのだろうか。

しかし今はひたすら走る他なく、痛み始めた足から意識を逸らす。

そしてもう一度前を見たときには、フェルモンド先生の姿は消えていた。

「しまった、見失った……！」

考え事なんてしてるからだ。フェルモンド先生の足が無駄に速いのも悪い。

いくつもある分かれ道を順に覗いてみるが、いずれの道の先にもフェルモンド先生の姿は見当たらなかった。

俺が途方に暮れそうになったところで、近くからまた爆発音が聞こえた。

まさか、フェルモンド先生が『ネズロを止めないと』と言っていたのは、爆発のことだったのか――？

そんな可能性が頭に浮かぶが、既に体は動き出していた。

さっきとは対照的に、爆発音が聞こえてきた方向へと向かう。明確な場所は分からなかったが、ある程度の方向が分かれば十分だ。

「待ちなさいネズロ！」

しばらく走ると、フェルモンド先生の叫ぶ声が聞こえてきて、ますます速度を速める。

どうやら近くには『ネズロ』がいるようだ。

止めなければという先ほどの発言、そして爆発の近くにいるところから考えて、ネズロはこの事件の首謀者なのかもしれない。

金属がぶつかりあうような音と、衝撃音が聞こえてきて、嫌な予感に拍車がかかる。

ぐっと足に力を込めて、最後の道を一気に駆け抜けた。

その先には燃え盛る建物をバックに、フェルモンド先生と全身黒づくめの男が対峙していた。影ができていて顔はよく見えないが、確実に先ほど森の中で出くわした男性と同一人物だ。

おそらくこの男が『ネズロ』なのだろう。

フェルモンド先生は振り下ろされた大剣を、細身の片手剣で受け止めていた。しかしフェルモンド先生の剣は傍目から見ても分かるほどに強度が足りておらず、今にも折れてしまいそうだ。

「フェルモンド先生！」

ほとんど無意識にそう名前を叫ぶ。

フェルモンド先生は顔をしかめ、俺を睨み付けた。普段の穏やかな様子からは考えられないような険しい表情だ。

「どうして追いかけてきたんですか、バカですかあなたは！　早く逃げろと言ったでしょう！」

「よそ見とは随分と余裕だなっ！」

ネズロの大剣が片手剣を弾き飛ばす。衝撃で吹き飛んだフェルモンド先生が、ズザッと音を立てて俺の前に倒れた。

「何かついてきたと思ったら、さっきの白髪野郎じゃねえか。フェルモンドの知り合いか？」

男の言葉に返答はせず、代わりに短剣を取り出して構える。

ネズロはそれを見て心底面倒そうに顔を歪めた。

「フェルモンド先生に近付くな。少しでも動いたら魔法を放つ」

背後に水の弾丸を生成しながらそう告げる。それでもネズロはひるむ様子一つ見せず、着実に一歩ずつこちらへ近付いてくる。

大口叩いて脅したはいいものの、こいつが何者で、どんな攻撃をするのか分からないので、迂闊に魔法を放つわけにはいかない。

ネズロはそれが分かっているのかいないのか、余裕そうな笑みを浮かべながらこちらへ歩いてくる。

俺が短剣を構える腕に力を込めると同時に、地面に倒れ伏していたフェルモンド先生が体を起こし、俺とネズロの間に立ちはだかった。いつの間に拾っていたのか、左手には片手剣が握り直されている。

「ネズロ、エルティード様に手出しすることは許しません。攻撃するなら僕だけにしろ」

ふらつきながらもネズロへ向かって敵意を向けるフェルモンド先生。

立ち読みサンプル
はここまで

ネズロはフェルモンド先生の言葉を聞いて、眉間に皺を寄せた。
「ハッ、満足に戦えもしないくせに、一丁前によく言うよ」
「何故このようなことをするのです。あなたに、大切な友人だったあなたに剣を向けるだなんて、僕は……」
「友人？　笑わせるな、フェルモンド。オレたちが本当の意味で友人だったことなんて一度たりともなかったっていうのに」
ネズロが不快そうに顔を歪めた。
顔にこそほとんど出していないが、フェルモンド先生はわずかに動揺しているように見える。
「確かにあのときのオレたちは仲がよかったし、それが続くものだと思ってた。でもそのちっぽけな友情を壊したのはいつだってお前だったろ」
フェルモンド先生は何か言おうと口を開いたが、言葉が紡がれることはなかった。代わりにネズロが舌打ちをして、大剣を構え直した。
フェルモンド先生はハッとした顔をして俺のほうを振り返った。
「エルティード様、早くここから離れて」
「で、でも、フェルモンド先生一人置いていくなんて……」